

○松田芳和、太田隆男、中塚正博（日本クリニック(株)・中研）、出田祐久、藤田忠義（安倉病院）、村田道代（華頂短大）、土井悦四郎（京都大学）、石津弘視（植木病院）、坪内涼子（愛知医科大学）、柴田幸雄（日本クリニック(株)・中研）

〈目的〉カキ(*Crassostrea gigas*)は亜鉛、タウリン、グリコーゲンなどの栄養成分が豊富に含まれており、広く一般に食品として利用されている。カキの抽出エキスは糖尿病ラットの血小板凝集能を抑制し、その作用は核酸系物質によることが、太田らによって報告されている。今回、演者らはこのことに着目し、糖尿病患者および健常者のボランティアにかきの抽出エキスを投与し、血小板凝集能、核酸系物質等の推移を検討した。

〈方法〉糖尿病患者8名（インスリン依存患者4名、インスリン非依存患者4名）、健常者5名にかき抽出エキス錠剤（エキス含量 270mg/tab.）4粒/day を6ヵ月間飲用してもらい、月に1回血小板凝集能、核酸関連物質濃度を測定した。

〈結果〉飲用開始後、2～4ヵ月の間に13例中8例において有意な血小板凝集能抑制がみられた。インスリン依存患者とインスリン非依存患者との間に差はなかった。全血中の核酸関連物質は、AMP比の有意な増加がみられ、ADP比は13例中9例で減少傾向がみられた。さらに、健常者3名、インスリン非依存糖尿病患者2名においてAMP比と凝集能との間に負の相関、ADP比と凝集能との間に正の相関が認められた。インスリン依存患者では相関がみられなかった。